κτίσμα
クティスマ

知っておきたいキリスト教のことば （172）

被造物 ひぞうぶつ

「被造物」とはその言葉の通り、造られた物のことです。キリスト教ではすべての物は神さまによって造られたと考えています。

創世記 1～2 章には、神さまが天地を創造された物語が載せられています。

聖書によると一日目に神さまは、「光あれ」と言われます。そして二日目には空と地面とを分け、三日目には草や木を造られました。

さらに四日目には太陽と星を、五日目には海に住む魚たちを、そして六日目には動物たちと人間を造られたということです。

聖書の言葉をとても大切にする教派では、この記述をもとに進化論を否定することもありますが、聖公会はそこまで厳格ではありません。また「一日」という表記も、わたしたち人間が考える単位とは違うでしょう。

聖書が伝えたいのは、わたしたちだけでなく動物を植物も、すべて神さまが造られたものであるということ。だからそれらのものをわたしたちも大切にしないといけないということです。

天地創造の最後に神さまの、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。（創世記 1:28）」という言葉がありますが、この「支配」というのは自分の思う通りに壊していいということではありません。

新しい聖書では「治める」という訳語に代わっていますが、「適切に管理する」という意味なのでしょう。神さまが造られたこのすべてのものを大切に、またわたしたち自身も被造物だということを忘れずにいたいものです。

次回は「羊飼い」です。お楽しみに。

「星の創造」
ミケランジェロ・ブオナローティ
（1475～1564 年）

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

（創世記 1 章 31 節）